

---

# Unknown

朔望

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Unknown

### 【Nコード】

N6537C

### 【作者名】

朔望

### 【あらすじ】

普通の町、普通の家庭に育った有利と冬真は、最近多発している通り魔殺傷事件のことを知る。二人と+で織り成す物語。

Memory of N

「クク、苦クク、苦苦クク苦苦クク」  
ついおかしな笑い声が漏れる。

持っていたそれはまだ温かい。

指から血が滴る。もちろん俺の指ではないが・・・。  
後ろを見れば血が続いている。まあ、大丈夫だろう。  
窓からかこちらを見ているやつに気づく。

「俺は、俺はここにいるぞおお!!」

そいつは恐怖の表情を浮かべてカーテンを閉める。  
クククク、心の中で笑う。

「とうとう、面白くなってきた」月の下一人呟く。

Memory of T

四月 桜は咲き乱れ春の到来を知らせていた。  
と、そこに場違いな音が鳴り響く。

ぴ、ぴぴ、ぴぴぴ、ぴぴぴ、ぴぴぴぴ・・・  
「ううう・・・んう・・・五月蠅え~~~~!!!!」

僕の投げた目覚ましは綺麗な放物線を描きながら落ちてゆくと、不  
吉な音を立てて床へと落ちた。

新しいのを買いにいかなきゃ。

飛んできた何かの部品を見ながら思う。

ベッドから起き上がり着替えて顔を洗いにいく。

鏡越しに覗き込んでくる顔は、世間的に言つと中の上といったところか、と、自らの顔の評価をする。

食堂に行くと、母親がテレビから顔を上げて、

「あら、早いわね?」という。

「受験生だしねw」

笑って答える。母さんもつられて笑う。

「パンにする?ご飯にする?」

と、毎朝かわることのないフレーズを使って聞いてくる。

僕は、躊躇わずに、

「パンでいい」

と答える。

「何枚?」

「一枚でいいよ」

「冬真、今日から新学期なんだからしつかり食べなさい」

「いいよ別に、それに今日は午前中で帰ってくる」

と、他愛ない会話をしてから、パンが焼けるまでの間テレビを眺める。

テレビの中には真剣な顔つきのキャスターが何かニュースを読み上げているようだ。

焼けたパンを頬張りながら、よくよく見ると最近このあたりで続発している連続通り魔殺傷事件の話だった。

犯人は「他に仲間を知らないか?」「俺はここだぞおお」などと、意味不明な言葉を叫びながら鋭利な刃物で切りつけてくるといふ。凶器は見つかってないらしい。

まあ、僕には関係ないことと、席を立ち洗面所に行き歯を磨く。

学校へと向かう為靴を履いていると、外から通学する小学生の笑い声が聞こえてくる。

小学生のころは、あんなふうに何も考えず一日一日が楽しかったのを思い出すと、ふっ、と笑いがこぼれる。

でも今は、今日からまた学校が始まると思うと気持ち沈む。これは全国の学生の中でも珍しいというほどのことでもない。大勢いるだろう。

まあ、そんなことを考えながらドアをくぐり学校へと家を出る。

## Memory of Y

四月 桜は咲き乱れ春の到来を知らせていた。

と、それまで狂ったように囀っていた小鳥が向かいの家の窓に起き上がるものを見つけると驚いたように飛び立っていった。

チュン、チュン、チュチュ、チュンチュン……

「ふあああ……」

鳥たちの盛大な囀りで起こされてしまった。

当の鳥どもはというと、俺がおきたのに驚いたのか向かいの木から飛び立っていったようだ。

然しこれは、一日の目覚めの中では最上級の目覚めかもしれない。そんなことを考えながら、割と片付いた部屋を見渡し壁に掛けてある制服に目を留めると、着替えて1階へと降りてゆく。

顔を洗い、居間へと向かうとそこには既に父親が新聞を広げ朝飯を喰っていた。母親も隣にいた。

「おはよう、ユーリ」

「おはよう」

両親と挨拶を交わし、父の向かいの席へと座る。

魚の身を解し、口へと入れる。続けて、軽く白い湯気の上がる米を口に入れる。窓の外を通る車の音以外ほとんど音がしない。静かだ。

とそこで、新聞の一面に「連続刺殺事件 犯人は精神異常者か？」という文字があるのを見つける。何でも最近このあたりで発生している事件のことらしい。

俺は、記憶をたどり事件に関する情報を探し出した。確か鋭利で巨大な刃物で昼夜関係なく突然に切りつけられるというものだ。これは非公式だが、体の一部が切り捨てられているらしい。それは首だったり、腕だったり、さらには腹部でばっさり繋がってなかったりしているという話だ。

まあ、俺には関係のないことと別段気にしてはいない。

ふと、目の前の皿を見ると何も乗ってないことに気づく、

「ご馳走様」

そう言い残し、俺は席を立つ。歯を磨き自分の部屋へ戻る。

ベッドの上の時計が7時10分を示す。あいつが来るにはまだ早い。

そういえばこの前あいつが、俺はもう受験生なんだから寝坊はしない、とか言ってたな。無理だろ。思わず、笑みがこぼれる。

と、そのとき窓の外から、

「おい、おきてんのか〜？早くでてこい！！ユーリーー！！」

と騒々しい声が聞こえた。時計を見る、さっきから10分と立ってない。

「わかったよ！聞こえてる、今行く」

内心驚きながらも返事をする。あながち、この前の誓いも無理ではないかもしれないと思うほど、珍しいことだった。

まあ、でも無理だ、うん、

冷静になっと思う。

階段を下り、真新しい靴を履く、と、そこで忘れ物に気が付く。

急いで階段を上り、机の上にそれを見つける。プラスチックのそれには白地の文字が書かれている。渋谷区在住の人が喜びそうな文字だ。ふっ、と笑いが漏れる。

外から、「はやくしろよおおっうっ！！おい、有利！！」と、叫び声が聞こえる。

早く行ってやるか、と玄関へと向かう。プラスチックのそれを付け、靴に足を通し、ドアノブに手をかける。

「行ってきまあす」俺は外に出る。

## 2・「A mythical opening」

### Memory of T

やっと、有利が出てきた。こいつ絶対僕がまだ遅いと思ってたんだ。

「おはよう」

有利が出し抜けに言う。

「お、おはようー!!」

「また、今日は朝からうるさいなw」

「そんなことは無い、君が遅いからだよ」

「いつもより少しばかり早く来たからって威張れることじゃねーよw」

少しむっとしたが、言い返す言葉が無くて俯いた。

少しして、有利が思い出したかのように言う、

「そういやお前宿題終わったのか？」

「むう、失敬な！ちゃんと終わったよ!!」

また、イラッとすることを。でも、まあこんな会話も久しぶりだと思うとなんだか楽しい。

しかし、黙って馬鹿にされ続けるわけにもいかない。何か言い返そうと口を開いた。

「君だつてさ、t」

「キヤーーーーー!!!」

一瞬何の音かわからなかった。それが悲鳴だとわかれると、有利と顔を見合わせうなずいた。

「いこうー!!」

「ああー!!」

声の方向へと走り出す。そのときはただ好奇心だけだったんだ。僕はまだあんなことになるなんて思っても見なかった。

## Memory of Y

ドアをくぐり朝日の下に出る。

冬真の顔を見ると少し怒っているのが見て取れる。

「おはよう」

突然俺が言つと、

「お、おはよう」

と、鳩が豆鉄砲を食らったかのような顔で言い返してくる。

「また、今日は朝からうるさいなw」

「そんなことは無い、君が遅いからだよ」

「いつもより少しばかり早く来たからって威張れることじゃねーよw」

そんな風に冬真をからかう。こいつが怒るのはわかっていた。でも、こいつがそんなことはすぐ忘れるのもわかっていた。

「そっぴゃお前宿題終わったのか？」

「むう、失敬な！ちゃんと終わったよ！！」

もう一度からかう。こんな会話も久しぶりだったし、何より冬真の隣が心地よいせいかな今日は口が軽い。

「君だつてさ、t」

「

「キヤーーーーー！！！！」

珍しく言い返そうとしたが、近くの悲鳴にかき消される。冬真を見る。まだそれが何なのか分かってないのかぼかんとしている、が、すぐにこちらを見る。俺はうなずいた。

「いこう！！」

「ああ！！」

声の方向へと駆け出す。そのときはただ、何かあったのかという疑問だけだった。

俺はまだあんなことになるなんて予想もしてなかった。

### 3・「An opening of tragedy」(前書き)

そして、不具合が生じる。

### 3・「An opening of tragedy」

Memory of N

順調だ、心の中で呟く。後もう少し、2メートル、1・5メートル、1・3メートル……

だがそこで女が気づきやがった。

「キャーーーーー!!!」

五月蠅い、五月蠅い、五月蠅い五月蠅い!!!!!!!

女が喚きながら逃げ出す。すぐに捕まると分かっているとしてもそれが

弱き者の習性だ。

でも、だが、しかし、だからといって、俺は捕まえない。大丈夫、すぐに喚けなくしてやる。

俺は女を追った、そしてすぐ後ろに追いつく、女がこける。女は恐怖の表情を浮かべている。

「苦ククク苦苦ククク」笑いが漏れる。俺は、手のそれを女へと振り下ろす。

地面に南瓜ほどの物体が落ち、すぐに周りが深紅に染まる。

「クク、クククク苦苦クク……」

笑いが止まらない。

とそこで、此方に近づいてくる足音に気づく。

「さあ、次の生贄は誰だ？」

楽しくてたまらない。

Memory of T

何があっただろう、事故なのか、それとも事件か。そんなこと

を考えながら悲鳴の上がった方へと走る。有利は後から付いてくる。角を曲がる、人がいた。どうやらここが悲鳴の発信源のようだ。だけど僕らの目に飛び込んできたものは、想像のしてなかった光景だった。

血だらけの路地、頭の無い女の人の体、無造作に転がる頭、僕は吐き気がこみ上げてくる。

でも、そんな吐き気もすぐに恐怖に変わる。

死体の横に屈折した笑いを浮かべて、男が血まみれで立っていたからだ。

ヤバイ、やばい、この男はヤバイ。頭の中で警鐘がなっている。だけど、それと同時に何故か僕のちんけな正義感が膨らんでいく、「おい、そこから動くな！！！！」あーああ、言っちゃたよ。僕の中でもう一人の僕が呟く。

「オイ、何言って」後ろから有利が叫ぶ。

「ユーリは黙ってて！！こいつは悪人なんだ！！」

君は何に拘っているんだい？また、もう一人の僕が言う。

気づくと僕は男へと向かって行った。

「おい、待て！！こいつは」

後ろのほうで、有利の声がする。

男が此方に一歩踏み出すのが見えた。男が腕を振り上げる。

次の瞬間、目の前が暗くなった。何が起こったのか分からなかった。

気づけば目の前にコンクリートがあった。遠くに何か落ちていくのが分かる。

「ああ、なんだ手てか、、」

肩から下の腕が血飛沫を上げながら落ちていくのが見えた。誰のだらう？

誰かが僕の名を呼んでいる。誰の声？僕は誰？

まぶたがゆっくりと閉じる。

さっきの悲鳴は何なんだろう。女性の悲鳴だったけど……。そんなことを考えながら冬真の後ろを走る。

冬真が角を曲がる。コンクリート塀の向こうに姿を消す。悲鳴はこのあたりで上がったはずだが……。俺は走るのを止め、歩いて後に行く。

だが、俺たちの目の前に広がっていた光景は、こんな住宅地にはあるはずの無い光景だった。

血がべったりと付いたコンクリート塀。その向こうの桜までもが朱に染まっている。その下には、目を見開いたまま絶命したと思われる女性の首。そしてその体。そして何より、いや、だからこそ、その隣に立つ男が不気味だった。

そこで俺は男のあまりにも奇妙な、そして理解のできないものに気づく。

男の腕の肘から下が異様に長い、伸ばせば地面に付くだろう。さらにそれは先に行くにしたがって細く鋭くなっている、そう、まるで……。

にげる、逃げるニゲロ、誰かが近くでそう言う。そこで自分の声だと気づく。逃げないと、そう冬真に伝えないと、……

「おい、そこから動くな!!!!!!」

そんな声で俺の思考は遮られる。

「オイ、何言って」 咄嗟に叫ぶ。

「ユーリは黙ってて!!!!こいつは悪人なんだ!!!!」冬真が言い返す。

ああ、こうなるともう手が付けられない。なぜ、お前はいつもどうでもいいことに拘るんだ。だが、今こんなこと言っている場合がないんだ。と、そこで冬真が男のほうへと走り出す。

「おい、待て!!!!そいつは」

いやな予感がした。今朝見た新聞の記事。巨大な刃物で切りつけ

られる連続通り魔事件。男の巨大な腕。だけど、でも、しかし、俺はまだ頭の片隅でそれを否定していたのかもしれない、本気でとめれば冬真と逃げる事ができたかもしれない。けれど、運命というものとは冷たくて、そのうえ残酷だった。

男が冬真のほうへ一歩踏み出すのが見えた。男が腕を振り上げる。その瞬間音が消えた、そんな気がした。

男の腕は冬真へ向けて振り下ろされる。肩から胸へとそれはなぞるかのように斜めに下っていく。冬真の腕が大空へと舞う。冬真の胸からは血が、あたかも噴水のように噴出す。男の顔がさらに紅く染まる。腕が、血飛沫を上げながら落ちていく。冬真の唇が動く、だが何と言っているのか分からない。

「冬真、冬真、トーマ逃げるぞ！！起きろよ！！！！」だが反応はない。

遅れて憎しみが胸の中に広がる。目の前の男に、冬真を止められなかった自分に。そしてあまりにも残酷な運命の女神に……。男のほうへと疾風の如く走る。敵わないことは分かっていた。だけど、それが守るべきものを守れなかった人間の習性なんだろう。ゴスツツ、鈍い音を立てて俺のこぶしが男の頬へと当たる。

「つてえ……なあ。生贄は生贄らしく隅で震えて泣いてるつての」次の瞬間腹部に痛みが走る。傷口から自らの内臓がずり落ちていくのが分かる。下を向くと腸やら胃やらがアスファルトに碎け散っているのが分かる。

男を見る。「そんな目でこつちを見んなつて。」腕が胸元へと振り下ろされる。

冬真すぐにそつちへ、、、、、、  
ゆっくりと倒れる。

#### 4・「The name is a clown」

The name is a clown

Memory of N

餓鬼が二人のこのことやってきた。こういうのを迷える子羊って言うんだって。ん？ちがうか？

まあ、いい。丁度、血が足りなかったところだ。この際餓鬼でも何でもどうでもいい。

「おい、そこから動くな！！！！」

おいおい、動かないほうがいいのはお前らのほうだっつーのw

「オイ、何言ってる」

オ、もう一人は分かっているみたいだがwまあ、カンケーネーかww

「ユーリは黙ってて！！！！こいつは悪人なんだ！！」

コイツハアクニンナンダ！！ アクニンナンダ！！

いいねえ、そうだ俺は悪人だ。だからどうした。20年弱しか生きてない餓鬼に何が分かる？

餓鬼の一人が走ってきた。さあ行こうか、わが道化よ。餌が走ってくる。貴様にちゃんとした名はないが。肉を食らうのに、血を啜るのにそんなものはイラネエ。

「おい、待て！！！！そいつは」

もう一人の餓鬼がわめくがもう遅い。一步踏み出し、相棒を左から斜めに振り下ろす。

腕が飛ぶ、胸から血が噴出す。俺に血が吹きかかる。たまんねえ。餓鬼が倒れるともう一人が狂ったように叫びだした。

「冬真、冬真、トーマ逃げるぞ！！起きろよ！！！！」

しかし、餓鬼に反応はない、まだ死んではなさそうだが気を失っているのか？まあ、そんなこと俺には関係ない。

だがそこでもう一人の拳が俺の顔面に当たる。

「つてえゝゝなあ。生贄は生贄らしく隅で震えて泣いてるつての」  
もう一人の餓鬼の腹部を横一文字に斬る。内臓が飛び出す。ああ。  
「あ。」

横たわったそいつが俺を見上げる。その目には明らかに憎しみの炎が燃え滾っていた。

「そんな目でこっちを見んなって。」今度は足元を縦に切る。餓鬼が倒れる。

「クククク苦ククククク苦……」

笑いがこみ上げる。どうだ血は足りたか？心の中で相棒に問いかける。

## Memory of T

何かが横に倒れる音で目を覚ます。  
人のようだ。

だんだん、頭がはつきりとしてくるに連れて、視界もはつきりとしてくる。するとそれが有利だと気付く。

「うう……ユ、ユーリ、、ユ、ウリ」弱々しい声しか出ない。

「お、何だ！お前起きてたのか」男が嬉しそうに喋る。

「トーマ、お前生きて……」有利が驚く。  
が、その声も弱々しい。

道路には僕の血と有利の血が混ざったと思われる血溜りができている。と、そこで自分の腕がないことに気付く。それと同時に痛みがよみがえる。「うぐう……」痛みで声が漏れる。

「大丈夫か？」有利が囁く。

「あらあら、痛いかい？洩らしそうか？死にそうかい？なら俺が楽にしてやるヨw」男の下品な笑いが漏れる。

「や、め、、ろお」有利の声。

男が腕を振り上げる。だが、

「うわあ、道路が真っ赤だあ〜」幼い女の子の声が聞こえる。

「おっと、また生贄だ、お前らはもちつと待ってる。すぐ終わらせるからよw」また男の汚らし い笑いが聞こえる。

女の子は自分の置かれている状況が分かってないらしい。ぽかんとしている。

男が女の子に近づく。

止める！叫んだつもりだった。だが、「ヒューヒュー」と頼りない音を出したただけだった。

止める、止める止める、止めるおお！！！！必死に叫ぶ。だが男に届きはしない。

動け、動け動け動け、動けえええ！！！！！！必死に思う。だが体は動きはしない。

なぜ、体が動かない、僕の体なのに？なぜ、有利を守れない、僕が巻き込んだのに？なぜ、女の子を守れない、関係ないのに？なぜ？なぜ、僕には守ることができない？

なぜ、守る力がない？なぜ、なぜ？

男が腕を振り上げる。女の子は男を見上げている。

止める、止める止める、止めるおお！！！！！！

・・・が欲しいか？

力が、力が欲しいか？

ああ、欲しい、力が欲しい！！！！！！

力が欲しいのならくれてやる！！！！！！

まぶしい、回り全てが白だ。

だが果てがあるようには見えない。

此処は何処だ？有利は？男は？女の子は？

痛みも感じない。あああ、僕死んじやったのか。

だがそこで誰か立っているのが見える。

女の子だ。金髪の髪。蒼い瞳。どうやら僕らとは違う人種のような。だがまだ幼い。

「君は、女神様？」僕は、自分が生きてはいないということも踏まえて尋ねる。

「あはは、違うわ。それに死んじやってもないわ」彼女は屈託のない笑顔で言う。

なら、夢か？だが夢にしてはやけに現実味がある。

「夢じゃないわ。あなたは力を求めました。私はそれをあなたに与える為に呼んだのです」

「じゃあ、此処は？」驚きながらも僕は問いかける。

「此処は精神の支配する世界。即ち、貴方の心の中です」

僕は驚く。まさか自分の、いうなれば、心の中に言うなんて。

「雑談はこれくらいにして、本題に入りましょう。」

そういうと彼女は深呼吸をした後、真剣な顔になる。

「汝は、何故力を求めるか！！」彼女が問う。

「ぼ、僕は目の前で人が傷つけられていても如何することも出来なかった。だから、僕は、僕はその人たちを救う、守る力が欲しい！！」少し戸惑ったが僕は叫ぶ。

「では汝に守る力を与えよう！！」彼女が力強く言う。

「ありがとう、でもどうやって此処から……」

「願えばいいのよ」もとの口調に戻った彼女は質問の続きを察して言う。

「此処から戻りたいと、戻ったら誰かを守りたいと願えばいいのよ」既に夢だとは思ってなかった僕は素直に従う。

そうしたとたんに彼女が下に下がり始める。いや、僕が上がつているんだ！

「あっ、そうだ！君は……！？」まだ名前を聞いてなかったことを思い出して言う。

「私は、私はアリス」

「じゃあ、アリスありがとう、バイバイ!!」僕は目いっぱい  
で叫ぶ。

「うん、バイバイ!!」アリスが叫び返してくれた。  
目の前が真っ白になる。

## Memory of Y

血だらけのアスファルトの上に倒れこむ。

全身に鈍く痛みが走る。

体は動こうとしない。腕さえることは出来ない。

俺は何も出来ない、心の中で嘆く。

「うう・・・ユ、ユーリ、、ユ、ウリ」弱りきった声がした。

だが、何処から発せられた声なのかすぐには分からない。

「お、何だ！お前起きてたのか」男が驚きと喜びの入り混じった声  
で叫ぶ。

そこでやっとその声が冬真のものだと気づく。

「トーマ、お前生きて・・・」驚きの声を出す。だがそれもか  
細く弱々しい声だった。

冬真の服は真紅に染まっていた。腕もない。早く病院へつれていか  
ないと。

そこで視界の端に男の足が映る。だがこれでは。

「うぐう・・・」冬真の呻き声が零れる。

「大丈夫か？」だが冬真の顔色はみるみる白くなる。

「あらあら、痛いかい？洩らしそうか？死にそうかい？なら俺が楽  
にしてやるヨw」野卑な笑い声が聞こえる。

「や、め、、ろお」切れ切れに叫ぶ。

男が腕を振り上げる。だが、

「うわぁ、道路が真っ赤だぁ〜」幼い少女の声が聞こえる。

「おっと、また生贄だ、お前らはもちつと待ってる。すぐ終わらせ  
るからよw」男の卑しい笑い声が響く。

少女は自らがこれからどうなるか、その危険を分かってない。ただ男と俺たちと血だらけの道を目で交互に見ている。

また俺の目の前で。そんなことは……。

止める、止める止める、止めるおお！！！！だが嘲笑うかのように男は少女に近づく。

憎い、憎い憎い憎い、憎い！！！！！！だが嘲笑うかのように俺の体は動かない。

何故、俺はただ見ている、こんなにも憎いのに。何故、俺は戦えない、冬真が苦しめられているのに。何故、俺は戦えない、少女が殺されそうなのに。何故。何故、俺は戦うことが出来ない。

何故、戦う力がない。何故、何故。

男が腕を振り上げる。少女が男を見上げる。

止める、止める止める、止めるおお！！！！！！

……が欲しいか？

力が、力が欲しいか？

欲しい。力が、力が欲しい！！！！

力が欲しいのならくれてやる！！！！！！

暗い。回りすべてが黒で出来ている。

何処まで続いているか分からない。闇その物の様だ。

此処は何処なんだ？冬真は？男は？少女は？

痛みも消えている。俺は死んだのか？いや、だが……

「そうだ、貴様は死んではない」

声の方向へと振り向くと少女が立っていた。

黄金の髪。空のような青い瞳。黒いドレスを着ている。異国の少女らしい。だが何処となく影がある。

「それに貴様に死んでもらっては困る」無表情な顔で言う。

「お前は・・・？それに此処は？」疑問を口にする。

「我が名はアリス、此処は貴様の深層心理の中だ。これが夢だなどと言うてないぞ」

「何故、俺は、」困惑した俺は呟くように言う。

「貴様は力を望んだ。だからそれを与える為に此処へ私が呼んだ」冷たい表情で言う。

「じゃあ、俺に力を・・・？」そう訊く。

「そうだ。我と契約を交わせば与えてやる」

「契約？」また問う。

「何、私の質問に答えるだけでよい。ではいくぞ」

俺は少し身構える。

「汝は、何故力を求めるか！！」彼女が問う。

「俺は、」一瞬ためらう。

「俺は、戦う力を、目の前の敵を打ち倒す、俺たちを傷付けやつを切り刻む、絶対の力が、力が欲しい！！」一気に言う。それと同時に先ほどの憎しみが胸の中で広がっていく。

「ならば汝に戦う力を与えよう！！」彼女が感情のこもってない声で言う。「感謝する」冷静な声で言う。

「さあもう戻るがよい。現し世へ戻りたければ強く願うがよい、戻りたいと」

俺は従う。するとだんだん俺が下へ落ちていくのが分かった。

「力を使う時も同じだ。尤も今の貴様では無理だが」

「！！？おい、どういう意味だ？おい、答える！！」俺は小さくなるアリスへと叫ぶ。

目の前が暗くなる瞬間「め。まだ、足りない」そんな声が聞こえた気がした。

## 5・「Down the Rabbit Hole」

### Memory of N

「うう・・・ユ、ユリ、、ユ、ウリ」弱った声がした。

最初に切った餓鬼の声だと気づく。

「お、何だ！お前起きてたのか」俺が殺し損ねていたことに驚き、玩具がまた動き出したことに喜んだ。

「トーマ、お前生きて・・・」さっき、倒れた餓鬼が言う。こいつも虫の息だな。

二人とも放っておけばそのうち死ぬだろう。

「うぐう・・・」最初の餓鬼（確かトーマとか呼ばれていた）が、呻く。

「大丈夫か？」二人目（こいつの名は知らん）が言う、テメエも死にそうなんだつつの。

「あらあら、痛いかい？洩らしそうか？死にそうかい？なら俺が楽にしてやるヨw」興奮してきた 俺は笑い声を上げながら言う。

「や、め、、ろお」二人目が言う。

俺は、腕を振り上げる。そして、餓鬼に振り下ろす。そうしようと思った。だが

「うわぁ、道路が真っ赤だぁー」幼い女の声。

「おっと、また生贄だ、お前らはもちつと待ってる。すぐ終わらせるからよw」全く次から次へと、神ってやつは何考えてんだか。ま、そういうの俺は好きだぜ。

今日はまさに人殺しの為にあるような日だな。そう思うと笑いが漏れる。

少女の前に立つ。腕をゆっくり上に上げる。世の中の汚いことを何も知らない、そんな目で俺を見る。止めてくれ、止めてくれえ、ヤメテクレ、ヤメテクレエエエエエエ そんな目で見つめられると・・・おれは、俺は・・・殺したくなるだろお!!? 腕を振り下ろす。

## Memory of T

上へと上つていくと穴が見えた。

黒くて暗い穴だ。入ったら最後何処までも落ちていきそうな・・・

そんなことを考えていても、僕の意味とは関係なく体は穴へと吸い込まれる。

やがて、床に降り立つことができた。

穴の中は思ったとおり暗かった。入ってきたところは見えない。消えてしまったかのように。

周りは漆黒の闇に包まれていた。だがどういわけか自分の手や、足はよく見えた。

そのうちに目の前にそれまでとは違う景色が現れた。暗闇の中にはつきりと。

森だ。城もある。遠くには山々も広がっていた。いろいろな動物もいる。飛んでいるもの、地を這うものさまざまだ。それは途轍もなく沢山いた。

だが、歩いていると気づく。この景色はどこかおかしい。「そうか!!!」思わず声を出す。

この中には死んだ、生命の活動が停止したものがない。枯れ木も、枯れ草も、虫の死骸も、動物の死骸も・・・そのうちに城へとたどり着く。

「すいません、誰かいますか?!?!?」そう、門へと向かって叫ぶ。

だが返事はない。ためしに門に手をかけてみる。すると驚くほど呆気なく、簡単に開いた。

人の気配は全くない。だが、城の中が荒れているというわけではない。

「ここには人は一人もないのか！？」愕然とする。

そうか、ここは人ではなく自然が世界を支配することのできる世界。人がいなくなることで成立する世界。

そんな寂しい世界はいやだ。有利と笑い会える世界に戻りたい！！僕は戻りたい！！！

すると、さつき通り抜けた門のほうから下品な笑い声が聞こえる。振り向くと男の背中が見えた。門の向こうだけ世界が違う。

男はその大きく尖った腕を天に向けている。その前には幼い少女がいた。

その瞬間、さつきまでの記憶がよみがえる。

「や、やあ、やめろおおおおお！！！」

男へと手を伸ばしながら門に入っていく。

一瞬目の前が真っ白になる。

## Memory of Y

下へと落ちていくと、穴が見えた。

白く光り輝く穴だ。入ったら最後その光で身を焼かれそうな・・・

だが俺がどう思おうと、俺の意思に関係なく体は穴へと運ばれていく。

暫らくして底に足が着く。

穴の中は見た通り辺り一面すべて白かった。入ってきた穴はもう

なかった。そう、まるで光に掻き消されたかの様に。

この白銀の世界は何処までも続いていた。だが何故か眩しいわけではない。

そのうち白銀の景色に違う映像がゆっくりと浮かび上がってきた。街だ。だが炎や弾丸の痕がある。戦場のようだ。そこには様々な死体が転がっていた。人の死体。うつ伏せで血を流すもの。焼け焦げたもの。銃で頭を撃ちぬかれたもの。犬の死骸。焼けた蝶。炭化した木。まさに地獄絵図だった。

しかし、その中を進んでいくといやでもわかる。此処はおかしい。「くそっ」思わず嘆く。

この中には生きているものがない。これだけの死骸の山だ、腐肉を漁る蠅がいてもよさそうなものだが……いない。

そのうち中央が噴水になっている広場に出る。

そこでは、何人かのさまざまな人種の少年少女が鬼ごっこのようなものをして遊んでいた。生きている人に会えたことでいくらかホッとした。すぐ近くに戦場が広がっているのにこんなにも平和な風景が目の前に現れるなんて。戦争なんて関係ないんだろう。

心からの喜びの笑い声が上がる。鬼が誰かを捕まえたのだろう、そう見当をつけ声の方向へと目を向ける。だが、そんな思いはすぐに掻き消された。

笑い声の主は二人いた。一人はさっきまで鬼のようなことをやっていた少女、もう一人はその少女につかまっと思ったと思われる少年。これだけ聞けばよくある遊びの1コマだ。だが二つだけ違うところがあつた。少女の持った赤黒く光るナイフと、少年の着ているTシャツに広がっていく赤いしみだ。だが二人とも子供特有の笑い声を上げている。心から楽しいときにあげるあれだ。俺が呆然としていると、子供の一人が俺に気づいたようだ。俺のほうを指差して何か言っている。言語は分からない、聞いたことのないようなしゃべり方だ。

すると全員が俺のほうへと近づいてきた。俺は一步下がる。ほとん

どの子供が凶器を持っていたからだ。

一人が鎌を振り上げて走ってきた。俺は後ろへ逃げる。

「お、おい、なんだってんだ」

だが、所詮相手は子供、軽く走っていても追いつかれることはなかった。初めのうちは・・・

そのうち足音近づいてくるのが分かった。後ろを振り返ると、そこにはさっきの子供は立っていなかった。代わりに刀を持った少年が走っていた。

「うそだろお!!」俺は走る速度を上げる。

後ろの足音も早くなる。振り向くと銃を持った青年が立っている。「ふざけんなよ!!!!」さらに速度を上げる。

足音が遅くなる。振り返ると老人が何かのリモコンを持っていた。立ち止まるうとしていた。

「ああ?」俺も立ち止まる。

老人が真ん中のボタンを押す。何も起こらない。だけど・・・そのうちに何処からか地響きのような音が聞こえてきた。

音のほうへ、空へと顔を向ける。するとロケットのようなものが此方へと向かってくる。側面にあるマーク、マルの周りに台形が三つある、それだけはよく見えた。

「じよ、冗談じゃねえ!!!!」必死に反対方向へと逃げだす。

「畜生、何処なんだよ此処は!!!!!!」冬真は何処に行ったんだよ。ああ、糞!!!!」

ずいぶん走った、そんな気がした。角を曲がると目の前にアーチ状の門が現れた。躊躇うことなくくぐる。

すると、後ろから野卑な笑い声が聞こえた。すぐになんなのか分からない。振り向くと門の向こうに男の背中が見えた。だれだ、分からない。その更に前に横たわっている体が見えた。これはよく知っていた。

「冬真!!!!!!」思わず叫ぶ。

刹那、さっきまでのことが頭を駆け巡る。

俺は帰らないと・・・・・・・・！！！！

「やめろおおおおお！！！！」

叫びながら門へと走る。

門の上に核ミサイルが見えた。

目の前が暗くなる。

Memory of T

次第に輪郭が浮かび上がってきた。だが、まだぼんやりとしている。

気づけば道路に立っていた。痛みはない、感じなくなってしまったのだろうか。

遠くのほうで叫び声が聞こえた。それも、だんだんと大きくなってくる。それと同時に視界の靄も晴れてくる。聴覚も麻痺していたようだ。

だが、叫び声の主に気づくと体が硬直していくのが分かった。あの男だ。

でも、様子がおかしい。叫び声は何かに苦しむようなそんな声だった。よく見ると肘のあたりを押さえて、呻いている。

「てめえ、よくも、よくもよくも、俺の腕をおおお」此方をにらんで声を絞り出すように言った。

そこで、男の腕がないことに気づく。腕からは止め処なく血が流れ、男の足元に小さな血溜りを作ろうとしていた。

でも、なぜ？

その思考でやっと、さっき切り落とされた自分の右腕が、天に向けて上げられていることに気付いた。

腕が回復している。と、言うか、腕が元通りにつながっている。

胸からの出血が治まっていることにも気付いた。左手で触ってみるが、痛みもなければ傷跡らしきものもない。

僕は、驚愕した。

だがそれは、腕が元に戻っているからでも、胸の傷がないからでもない。

それは、元に戻った右腕の肘から先が、人間のそれとは明らかに違う形状をしていたからだった。

指は鉤爪状になり、手首から少し上には刃渡り1メートルほどの両刃ナイフのようなものが突き出し、腕の脇のパイプ状の物からは蒸気のようなものが噴き出している。ナイフの先には血のような赤黒い液体が伝っていた。男の血だろう。

「う、うわあああああ」突然、遅れて恐怖が沸き起こる。見つとも無く叫びながら、腕を振り回した。これが実は気ぐるみで振り回せば抜けて飛んでいくのではないか、そう思ったからだった。だが、それは抜けるわけでもなく、周りの塀に刃の先を当てて切り落とし、それが本物で、威容に鋭いという事実を固めただけだった。

「くそつたれ。こんな所に適応者がいるなんて聞いてねえぞ!!!」男が喚く。

「あ、あああ、うう」女の子が恐怖の声を上げる。見ると目には涙が溜まっていた。だが、

「うるせえぞ!!!!!!!!!!」男が女の子の頬に裏拳を食らわす。

「きやああ!!!!!!」女の子が叫んだ。

その瞬間、僕の右腕が跳ね上がり、そのまま伸びて刃が男の右肩に刺さる。

「う、ああああああ」男が苦痛の声を上げる。

腕が縮み刃が抜けると、また、腕が伸びほぼ同じところに突き刺さる。さらに続けざまに三度刃が男の体を貫いた。そのたびに道路に血が飛び散った。

「や、やめろおおおお」左腕で、右腕を押さえ止めようとしたが、まるでほかの意志が働いているかのようにそれは動きを止めなかった。

何度も同じ動きを繰り返す。刺す。抜く。刺す。この繰り返し。

そのうち自分の腕が男の体を貫き続ける光景に吐き気が込みあがってきた。口の中に苦いものが広がる。目が霞む。どんどん目の前が暗くなっていく。そういえば、息をするのを忘れていた。

前に倒れこんだ気がした。

## Memory of Y

頬に当たる何かで目が覚めた。いや、寝ていた訳ではないので、気が付いたというべきか？

俺は飛び起きる。

冬真の居場所を、男の居場所を知りたかったからだ。そこで違和感に気づく。

「あ……」思わず声が出る。傷がない。

そんなはずはない！！さっきあんなに派手に斬られたんだ。少しの間呆けてる間に傷が消えるはずがない。

だけど、俺の腹は、俺の脚は、傷一つ残ってやしなかった。制服は派手に裂けているのに、だ。

けれど、今それを追求している場合じゃない。

冬真は？あの少女は？そして男は？

いっぺんに考えが頭の中を駆け巡る。

周りを見渡す。

まず、目に入ってきたのは、あの少女だ。

全身血だらけになっているが、特に傷ついているわけではなさそうだ。気絶しているように見える。

少し視線を動かしたところで俺はドキッとする。

少女のすぐ隣に男が横たわっていたからだ。だが様子がおかしい。息を荒くして悪態をついている。が、此処からは声は聞き取れない。冬真は？何処だ？



「おい、ダイジョウブか？つて、ああーあ、気絶しちゃったよ。演技台無し。まあ、あんだけ血い流してたらこおなるわな」男たちの一人が言う。

こいつも俺のこんな姿を見たからには殺してやる。

「テ、テメエラア」糞、かすれた声しか出ねえ。

「ああ、そうそう、君、もう、用済みやから」

「え？」

首に何か当たる。

## Part:2 The continuance of the dream

### Memory of M

「だめ！！！！」

「えっ！？何で？」

唐突に言われてびっくりした。

「だってお前めちゃくちゃつおいもん！！」

「そうそう、面白くないよう！」

「あっち、行こうぜみんな！」

ほらいつものパターンだ。

「いいもん、一人のほうが好きだもん！！」

遠ざかる背中に叫ぶ。

いつもと同じ台詞を、

でも懲りずに同じことを繰り返す。

「早く起きなさい！！！」

「んあわあゝ…………何？母さん」

「何？じゃないわよ。転校初日から遅刻してどうすんの！！！」  
時計の針は六時半を指していた。

「だからって、こんな時間に起こさなくても…………」

「あら、早起きは三文の徳って言うでしょ」

また、適当なことを…………

でも、まあ、あのまま昔のいやな思い出を夢で見てるよりましか・

・  
そんなことを思いながら階段を下りていく。

「父さんは？」

きよろきよろとあたりを伺いつつ訊く。

「道場よ、ほら早く朝ごはん食べちゃって」

「ふーん、朝早くから物好きなもので」

「いつもの事よ、あんただってちっちゃい頃はそうだったじゃない」

「ふぁ、ふひぁひはっふぁ・・・無邪気だったからねえ」

食パンを頬張りながらしゃべると、二回しゃべることになってしまった。

「またやってみる？」

冗談www

もうこりごりだ、やりたくない。

「行ってきます」

そういつて家を出た。

## Memory of T

くっそ、僕は、僕はなんなんだっ!!!!!!!!!!

僕は人を殺してしまった。文字どおり自らの手で

かつては綺麗に整頓されていた筈の其の部屋は、すでに見る影もなく荒れている。

枕からは羽が飛び散り、壁には穴があき、打ち付けた右腕からとんだ血飛沫が壁一面に飛んでいる。

どれだけ傷つけようと右腕の傷は瞬く間に傷跡も残らなくなった。たとえ、腕の骨を折ろうが、包丁を突き刺そうが、結局何をしようとも、痛みはあるものの体は健康そのものに再生する。

親は頻繁に何か叫んでくる。

だからって、たとえ愛情があっても僕の苦しみなんて誰にも分かるわけがないっ。

血を失くし続けて、ふら付く頭で思考しようとしても、僕に分かることはひとつのみ。

「僕は、バケモノなのか???」

何度もつぶやいた其の言葉は赤く染まった壁に消えていった。

## Memory of Y

あれから二週間、病院で検査しては首をかしげられ、警察で事情を聞かれては首をかしげられ、終いにはオオカミ少年かのような扱いを受けていた。

両親だってあの事件の半分も信じてないだろう。

あの状況から言えば俺たちが容疑者だ。しかし、凶器は見つからず、少年は二人倒れており、目撃者の少女は意味の分からないことを言うんだ。此れじゃあ、事件が解決するはずがない。それに、あの現場には俺たちの血だって流れてた。外傷はまったく無いにもかかわらず、だ。

全く警察も気の毒なもんだ。一人苦笑する。

そもそも、あれはなんなんだ。

いくら考えたって答えは見つからない。あの男（ニュースで中野だったか仲居だったそんな名前だったことを知った）の異形の腕、そして其の腕に酷似した冬真の右腕。

くっそ、理解できない。

それも結局病院で目覚めたら、元に戻っていた。それに、俺が見た夢、似たような夢のことを有利も話していた。俺は何か不安を感じて自分の夢のことは話さなかったんだが。

結局あれはどう説明をつける？

俺と冬真、そしてあの少女、三人が同じ記憶を共有してるんだ、夢だとは思えない。だとしたら、あの腕は、、、

「ああ、、、くそっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」何時も同じ答え。

行き着く先は「わけ分かんない、」だ。

「こおらっ!!!!!!!!!!またそんなに険しい顔して、老け顔になっちゃいますよー」

「うおあっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」不意の攻撃に間抜けな声を出す。

今、眼の前で、俺の眉間の皺をつまんでいるのは、俺のもう一人の幼馴染の智紀だ。

智紀って名前でも、男じゃなく、女の子だ。三人でよく日が暮れるまで遊んで、きまって三人ともそれぞれの親に捜され、別々の口から小言が同時に飛んできた。そんな平和な日々を過ごしてきたんだ、来る日も来る日も。

「そろそろ、朝のホームルームが始まるんじゃないかな? ほら、早く早く」

半ば引き摺られる様にして教室へと向かう。

教室に入ると隅のほうに冬真の机が見えた。中は空だ、何にもはいつてはいない。

あれから冬真には会ってない。自分の部屋に引きこもったきりだ。俺だって、どんな顔して会えばいいのか分からない。だから、内心ほっとしているのかもしれない。

「おらあー、ガキども、席につけっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

後ろから怒声が響きわたる。

「うるさいよ牧ちゃん、朝っぱらから酔ってんの?」

智紀が耳を押さえながら言う。

「おお、そうか今日もあたしはいい女かあ」

「酔ってるね、もう、決定っ」

「これこれ早とちりするねい。上機嫌って言うんだよ、こっこのは」

智紀はなぜかこの担任と友達のように話す。

うん、楽しそうだ。それもいつものこと。

変わらない、何も。

変わろうとする気配すらない。

俺の心の中がどうであろうと、いつものように世界は変わらずに進んでいく。

一人の世界がどうなろうと、人類の世界は不変なんだ

そう、冬真の席を見ながら思う。

## 続きといつかあとがき

### Memory of M

「え〜とつ、月夜見<sup>ツキヨミ</sup>、稔<sup>ミノル</sup>です。よ、よろしく」

「はいッ、拍手ッ！……！！！！！！！！」真横で牧野が叫んだ。

いやいや、そんなこと叫ばなくてもさっきからとんでもなく喧しいんですけど……

僕が入ってきたときから其処彼処から質問やら口笛やらが鼓膜を振るわせっぱなしだ。

「ねね、どこから来たの？」

「えっと、お、沖縄から」

「何か、沖縄語しゃべってよ」

「う、うみんなちゅー、かな？」

「はいはい、スリーサイズは？」

「え……」

んな、ストレートに

「やめなさいッ！……！！！！！！！！」

隣の女の子が水平チョップとともに叫んだ。

「ぐほあ」うあ、痛そ

「馬鹿だろ、お前。このエロ杉が……」後ろの席の男子が冷たい口調で言う。

「いいだろ、別に。あ、僕、上杉って言います。よかったら今度映画にでもいっく」

「いい加減にしろッ！……！！！！！！」

また水平チョップが飛んできた。

「ああ、つかれたあ」

あまりのどたばたぶりに疲労はMAXだ。

一日中質問攻めにされたんだからたまらない

「月夜見さん、今帰り？」

向こうから声をかけてくるのは、さっきのミラクルセーブ少女Aではないか

「あ、うん、えっと・・・」

「あ、あたし

突然ですがはじめまして、作者でございます。

実は残念ながら今回の作品は未完の物になってしまいました。

言い訳を言わせていただきますと、

時間の都合や、他の作品への愛情の移行などなど、

しかし、一番大きいのはアイディアがこれ以上でなくなってしまったことですorz

この作品がほぼ初執筆だったので本当に残念ですが、

これ以上この作品を続ける気力がなくなってしまったので、

いったんこの作品は、未完のまま完結(?)させ、

次の作品への原動力へしたいと思いますっ!!!!!!!!!!

それでは、お読みいただきありがとうございました。

2008/03/30

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6537c/>

---

Unknown

2010年12月1日07時09分発行